３５「鶴の恩返し」～ヒトならどうする編

村上春樹氏は「後追い」でなく、若い時分から時代を共有して読んだ作家の一人です。当時何に惹かれたかというと、それまでの作家たちが膨大な言葉を費やして書いた「時代の空気」のようなものを、明晰なわずかな言葉でさらっと描いたところでした。だから、いまだに好きなのはデビュー作「風の歌を聴け」になります。何となく書き出しがこうなったのは、その村上氏は海外文学の翻訳を多くしており、フィッツジェラルドもその一人だったと思い出したからです。今回の主題はフィッツジェラルドの「華麗なるギャツビー」の冒頭に関係しています、ここでは私がはじめに読んだ野崎孝訳を引用します（「ハルキスト」の皆様すみません）。それは「ひとを批判したいような気持が起きた場合にはだな、この世の中の人がみんなおまえと同じように恵まれているわけではないことを、ちょっと思い出してみるのだ」という父親が息子に語った言葉です。

さて、初任の頃の話です。生徒指導の案件が発生し、副担任の私も家庭訪問に同行することになりました。そこは冬の漁村で、暗い海からの風は無造作に積まれた網や干物のかごを小さく揺らしていました。土間を上がると広い座敷なのですが、仕切りなどなく、祖父母はお構いなしに大きな音でテレビを見、小さな弟や妹たちは部屋の中を走り回っています。家族全員がこの座敷で生活していたのだと思います。部屋の隅の小さなちゃぶ台を勉強机にしているようでしたが、天井は低いのに部屋は薄暗く勉強をする環境としては決して恵まれたものではありません。担任から反省文の誤字を書き直すように言われ、大きな背中を丸め辞書を調べ始めるのですが、それは小学生が使うような子ども用の国語辞書で、そのひどく古びた辞書を見た時に、突然胸を締めつけられるような思いがしました。今言われる「親ガチャ」などというイヤな言葉はもちろんなかったのですが、何不自由なくではないにしろ、自分用の部屋があり、大学にも行かせてもらった自分との境遇の違いを目の当たりにし動揺したからです。それまでの人生で周りは同じような生活環境の友だちばかりで、情けないですが、学校から帰ってから勉強に集中できる生活環境にいない子どもがいることにはじめて気づいたのです。教師になったばかりで、得意になって一方的な指導ばかりしていました。宿題をしてこなかったのを頭ごなしに叱りつけていました。何か事情があるかもなどと考えてあげる気持ちなど少しもなかったのです。前述した小説の言葉は使われた状況は違うのですが、それでもその言葉が重なり、この時の経験が私の教育者の背骨になったようにも思い出されます。実はこの初任校には教頭として戻りました。入学式の後、職員室に訪ねてきてくれたのは、当時の生徒たち。立派なお母さんになりながら、２２年前の面影はあきらかに残っていました。その一人に「また会えて良かった。先生が転勤して行った時、見送りに行けなかったことがずっと心残りだった」と言われた時、失敗も多かったですが、若い時の思い出が温かくよみがえってきました。

いよいよ３月で役職定年。終わりが近づき、今回書いたように昔のことをよく思い出します。随分と周りに助けられていました。レイ・ブラッドベリ氏の小説で、主人公はある人から命を助けられますが、それは返せない借りになります。それでも主人公は「あなたがどこにいるとしても、さあお礼です、お返しです。ぼくは次の人にまわしました」と考えます。そう、親の恩だって何だって、次にまわすしかないんですよね。ホントウにそうだと思いませんか。　　令和７年２月３日　大村城南高等学校長　中小路尚也